ふ。

噴火口を下り中腹より南東を望めば狐島、中ノ臺、鶴江臺の三臺を認め得る。此等の臺地も又覆盆の如く扁平で森林を以て被覆せられ其の間に杉垣を繞した密柑畠があり其の他、馬鈴薯甘藷、大豆、小豆、大根等を栽培した所もあり斯かる扁平の臺地は萩地方の方言では之を臺と稱すると厚東氏は語られた。之れ又凡て玄武岩臺地である。

斯くの如く萩地方は玄武岩が甚だ豐富であるから從つて之れを石材とし石垣土臺石等に使用するもの甚だ多く志都岐山神社を祀れる舊城址一帶、堀内(ホリチ)附近の舊藩士邸の石垣等は殆んど凡て黑色の玄武岩を用ひ其處に萩特有の文字通りの地方色が現れて居りブリュンが「佛蘭西國民史」中の「佛蘭西人文地理」第十四章 Types Régionaux De Maisons Et Carte Générale Des Toits 中に述べた樣な事が全く虛構でない事を點頭かせるのである。

擱筆するに臨み往年終日案内の勞をとられ幾多の教示を賜はり又深更萩埠頭に余を見送られたる厚東晴二氏の厚意に對し深甚の謝意を表する。(一九二五・八・四)

地理教材としての地形圖（十五）

寒風山

陸地測量部五萬分ノ一男鹿島一號「船川」同五號「戸賀」右の二葉の地形圖を連ぬれば秋田縣の男鹿半島の地圖となる。男鹿半島は元來は島であつたが二つの砂洲で陸地に結ばれたもので其

間には八郎潟なる本州最大の潟湖が抱かれてゐる。此地形は學者のトンボロと稱するものに近いが私共は男鹿半島式の砂洲と呼びたい。相州江の島は一の砂洲で結ばれた形式で江の島式砂洲と呼ぶべきであらう。

男鹿半島を遠望すれば二の稍隆起した山がある。地形圖に此を求むれば東なるは寒風山で西なるは男鹿山である。此二の山を別として半島は三階段の海蝕臺地をなしてゐる。第一段の高さは平均七十米、第二段は百十米乃至百二十米第三段は平均百七十米であるが第二第三の高段は西方男鹿山の周圍に發達して他の大部は第一段である。此等の臺地は可なり充分に開析せられてゐる事は一目瞭然である。たゞ南岸の臺島附近には第一段よりなほ一段低い新鮮な三十米臺地が讀み得られる。半島の内で男鹿山は最高く眞山、本山、毛無山等六百米内外の高距に達してゐる。男鹿山に源を發する諸川は北東に流れて後略羽立、北浦を連る線に沿ふて北西流或は南東流して海に入るのであるが此は地質に關係がある事で北西―南東の線卽諸川に直角なる線は此臺地を構成する第三紀層の走向である。第三紀層は秋田縣に於ける油田の層序に一致し小さき褶曲は別として大體に北東に向つて單傾斜をなしてゐる。であるから半島の西には古い下位の岩石、東には新しい上位の岩石がある。もつとも男鹿山の一部には後に噴出した複輝石安山岩が現出してゐる。第三紀層の上に不整合に水平な洪積層があるが此は主として圖の東北方潟西村方面に發達して兩總地方の洪積世臺地とよく似た四十米ほどの臺地をなしてゐる。

寒風山は火山であつて紫蘇輝石安山岩よりなつてゐる。此火山は甚小さくて高さも僅か三百五十四米である上に全山奈良三笠山よりも美しい芝山で何處でも歩けるから火山の形態概念を得るにはもつてこいである。私は寒風山は火山の模型だと言ひたい。地圖で見ると頂上の西に直徑七百米ほどの立派な噴火口が讀み得られる。其中央部は低平な中央火口丘をなしてゐる。此大火口の南にはもつと高い所に完全な圓い小さ

い第二の噴火口を認め得られる。寒風山は前記の七十米から四十米の臺地の上にきちんとのつてゐて全く獨立した火山である。圖上でも七十米から八十米以上で不規則な凹凸がある處傾斜した平たい裾野狀の土地、滑な等高線をもつもつくりとした隆起部等の含まれる地域を頂上を中心として試に線を引いて圍めば實地踏査の地質圖で紫蘇輝石安山岩と着色すべき區域と大略一致するのである。寒風山の周圍には海蝕臺地は刻まれて居ない。此は此火山の噴出が此等の海蝕の時期より新しい故でなくてはならぬ。船川は東北地方日本海側に於ける最良港である。それは男鹿島の東南面に位して北、西、の風浪を避け得らるゝ故である。秋田縣は南の風をも防いで完全な港となすべく根ノ崎より東に突出する防波堤を築造中でその工事は八分通り出來上つた。かゝる良港であるが東北地方の產業不振の故に未だあまり有效に利用されてゐない。今日では北海道石炭の小移入があるだけである。以上の他に讀圖上注意すべき事項は大略次の如くである。

一、南岸に椿といふ地名がある。椿の自生の北限で植物學上の天然記念物のある土地である。

二、脇本村より東の砂洲上に平行に走る砂丘と沼地の地形。

三、一ノ目潟、二ノ目潟、戸賀灣、三ノ目潟の圓形な凹地。此はマールに近いもので其周圍には噴出した輕石砂がうづ高く堆積してゐる。（マールとは火山活動の初期爆發が鉢狀の穴となつて殘つたものである）（槇山）

編輯便り

火山號として倍大號を出す豫定でありましたが出版書肆の都合で、普通號大にしましたが、圖版殊に京都帝國大學教授川村多實二氏の麗筆櫻島火山の油繪を多色刷にして卷頭を飾ることの出來たのは讀者と共に編者の喜に堪へぬ所であります。動物學者のヘッケルが南洋を旅して描いた美しい色の——理學者の精緻と自然哲學者の傲放とを識り交せたプラシュの跡を賞でた私共には同じ動物學者であり自然哲學者である川村氏の快い描寫で噴火後の櫻島の形態につき、美と實とを併せ知ることが出來ました。雜誌の厚くなかつた御斷りをかれて圖版について一言します。